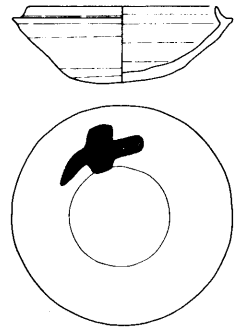
三重県埋蔵文化財報告　120

一般県道穴倉南神山津線道路改良事業に伴う

小屋城古墳群

―― 安芸郡安濃町南神山 ――



1 9 9 4 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター

1号墳出土金環

1号墳出土　記号の付けられた須恵器蓋・杯

序　　文

埋蔵文化財は、それぞれの地域の、そして我が国の歴史を明らかにする上での重要な歴史史料です。また同時に、後世に残さなければならない、私たち共通の大切な文化遺産でもあります。したがって可能な限り現状を保存してゆくことを大原則としておりますが、私たちの社会生活を向上させるための各種の公共事業もまた重要であることは言うまでもありません。そこで、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致します小屋城古墳群の発掘調査結果も、県道改良事業に伴って止むなく実施されたものです。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土木部・各関係事務所及び安濃町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝致します。

平成６年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　久保富子

例　　言

1．　本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、県道穴倉南神山津線道路改良事業に伴う、安芸郡安濃町南神山に所在する小屋城古墳群の発掘調査結果をまとめたものである。

2．　調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

主事　　小　林　　秀

主事　　石　川　隆　郎

主事　　筒　井　正　明

3．　調査にあたっては、県道路建設課、津土木事務所、安濃町教育委員会、ならびに地元の方々のご協力を得た。

4．　発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、管理指導課が行った。

5．　本書の執筆・編集は、小林が担当した。

6．　挿図の方位は、全て真北である。

7．　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．　遺物実測図の番号は、写真図版の遺物番号と対応させてある。

9.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　調査と成果 …… 3
Ⅳ　結　語 …… 15

図　版　目　次

ＰＬ．１　１号墳石室調査前
ＰＬ．２　１号墳調査風景
ＰＬ．３　１号墳石室
ＰＬ．４　１号墳石室遺物出土状況
ＰＬ．５　１号墳石室耳環等出土状況
ＰＬ．６　２号墳・３号墳石室
ＰＬ．７　１号墳出土遺物
ＰＬ．８　１号墳出土遺物
ＰＬ．９　２号墳出土遺物

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　調査区周辺地形図
第４図　調査前地形測量図
第５図　遺構平面測量図
第６図　１号墳丘断面土層図
第７図　１号墳周溝埋土断面土層図
第８図　１号墳石室平面図・立面図
第９図　１号墳石室二次利用面平面図
第10図　１号墳周溝出土遺物実測図
第11図　１号墳石室遺物出土状況図
第12図　１号墳石室出土遺物実測図
第13図　１号墳石室出土遺物実測図
第14図　２号墳石室平面図・立面図
第15図　２号墳石室出土遺物実測図
第16図　２号墳石室遺物出土状況図
第17図　３号墳石室平面図・立面図

表　目　次

第１表　出土遺物観察表

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関連して、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めてきているところである。

県道穴倉南神山津線道路改良事業地内に所在する小屋城古墳群は、当初、地形的な条件から遺跡である可能性は疑問視されていた。しかし、かつての分布調査によって須恵器片が採取されていたことから、平成４年度に当センターが試掘調査を実施した。その結果、若干の遺物とともに石室の石組み列が発見され、古墳の存在が確認された。

小屋城古墳群の取り扱いについては、その保存も含めて県土木部・津土木事務所と協議を重ねてきたが、この道路が地元の生活にとって必要であるとの判断から、やむをえず事前の発掘調査を実施することになった。また本調査に先立って遺跡の広がりを確認するため再度の試掘を行い、調査範囲を確定した。

発掘調査は、平成５年５月21日から開始して、同年８月12日に完了した。調査期間が梅雨時にかかり、記録的な長雨にも祟られて、予想以上に長引いてしまった。最終的な調査面積は430㎡であった。

2．調査日誌（抄）

5月11日　調査前の地形測量を行う。
5月19日　調査区内を伐開する。
5月20日　試掘調査を行う。
5月21日　発掘資材の搬入。表土を部分的に重機で除去する。
5月25日　人力による表土の掘削を開始する。
5月27日　北西部分で、１号墳の墳丘盛土と周溝を確認する。
6月１日　１号墳の周溝にトレンチを入れ、埋没状況を確認する。
6月３日　畑の石垣が、１号墳の石室奥壁の転用であることを確認する。
6月８日　埋土除去前の石室現況の写真撮影。
6月11日　１号墳の北西部分の周溝埋土掘削を完了する。土層断面図を作成する。
6月17日　路線地外の３号墳石室の実測完了。１号墳周溝南西部分の埋土掘削を開始する。
6月28日　２号墳石室の存在を確認する。
7月６日　１号墳石室の埋土除去を開始する。
7月８日　重機によって竹根を除去。
7月12日　１号墳南東部分の墳丘盛土と周溝を確認する。
7月14日　１号墳石室で、中世での二次利用面を確認する。排水溝を伴う。また、火を使用した痕跡も確認する。
7月16日　１号墳石室が片袖式であることを確認する。
7月19日　１号墳石室の中世床面の実測図を作成する。１号墳周溝北東部の埋土掘削を開始する。
7月21日　１号墳石室より耳環が３個体出土。石室床面をほぼ確認する。
7月22日　１号墳石室の遺物出土状況写真を撮影する。
7月23日　１号墳石室の遺物出土状況図の作成。
7月26日　２号墳石室の埋土除去を開始する。
7月27日　１号墳周溝の埋土除去を完了。新たに耳環が３個体出土する。これで耳環は３対となり、少なくとも３人の埋葬であることがわかる。
7月29日　調査区の写真を撮影する。
8月４日　２号墳石室の実測を完了する。
8月５日　墳丘測量を完了する。
8月６日　１号墳石室の実測を完了する。
8月９日　発掘資材の搬出。
8月12日　墳丘の断ち割り。作業終了。

Ⅱ．位置と環境

小屋城古墳群（１）は、標高321ｍの長谷山の北、東方へ舌状に伸びた丘陵の中腹に所在している。この古墳群は、県道穴倉南神山津線の道路改良事業に伴う一連の調査によって、新たに発見されたものである。同じ丘陵上には、14基の古墳で構成される南神山古墳群（２）が知られていたが、丘陵の尾根上に分布する南神山古墳群とは立地条件を異にするまとまりを示しており、別個の古墳群として報告することにした。なお古墳群名は、地元での通称地名をとった。

さて小屋城古墳群の所在する安濃川の中流域は、県下でも有数の古墳の集中地帯である。この地域で現在確認されている最も古い段階の古墳群は坂本山古墳群（３）で、４世紀末から５世紀初頭頃に比定されている。

古墳時代の中期になると、この地域の周辺でも、比較的大型の古墳が築かれるようになる。中でも明合古墳（４）は一辺約60ｍもの方墳で、北と南の２辺に造り出しを持つ「双方中方墳」という特異な墳丘形態をしている。また周囲には数基の陪塚を伴っており、その規模からみて周辺域での盟主墳と考えられている。

古墳時代後期に入ると、古墳の築造は爆発的に増加する傾向を示す。特に460基以上もの古墳の集中す

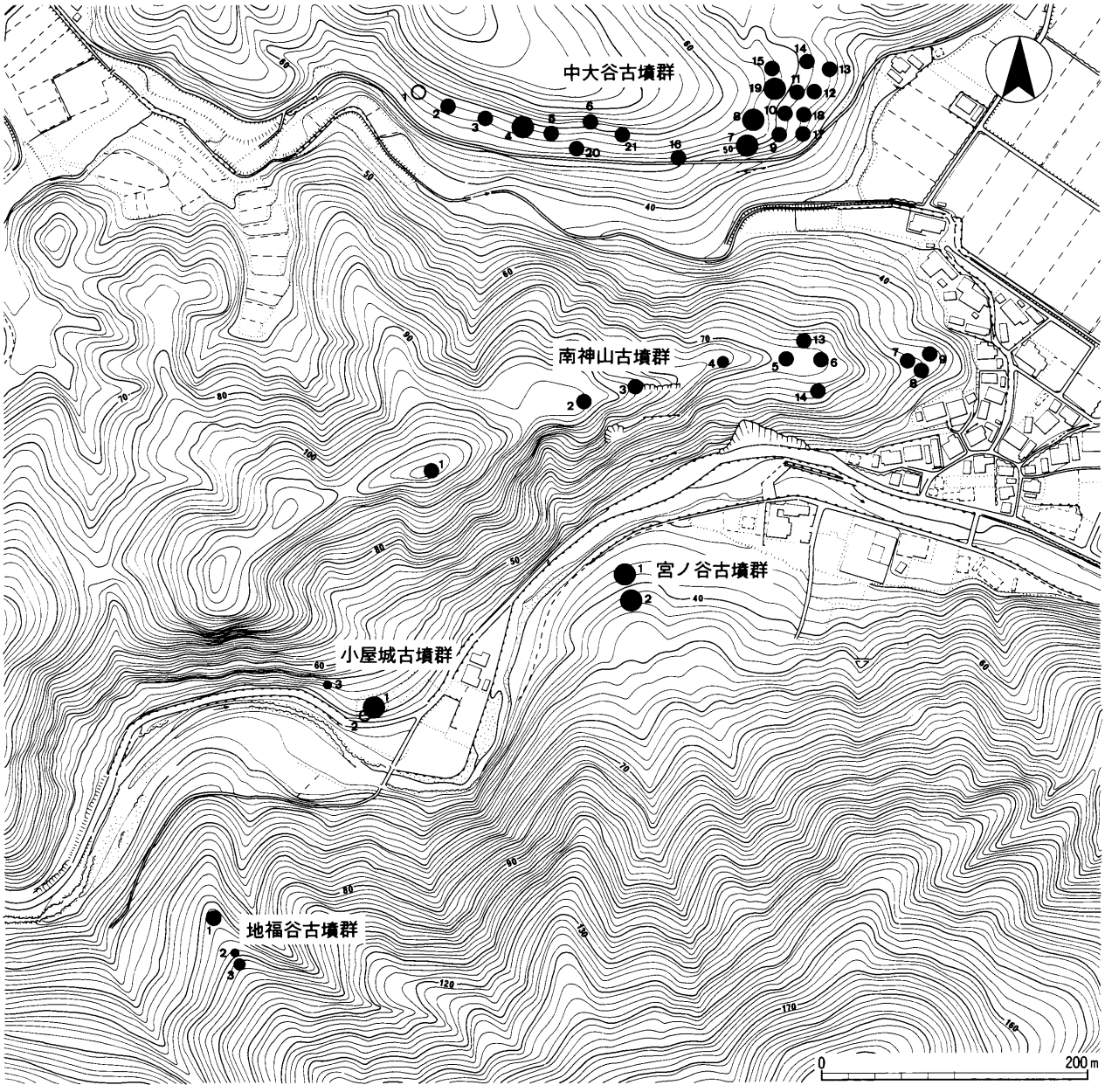
第１図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院 『津西部』『椋本』1／25,000より）

る長谷山古墳群（５）は出色で、全国的にも注目されるべき一大古墳群である。長谷山古墳群の古墳築造の最盛期は６世紀後半から７世紀であるが、近年発掘調査された、長谷山の東麓に位置する平田古墳群[①]（６）をもその範疇に含めるならば、長谷山古墳群の形成時期を５世紀の段階にまで遡らせて把握することも可能であろう。

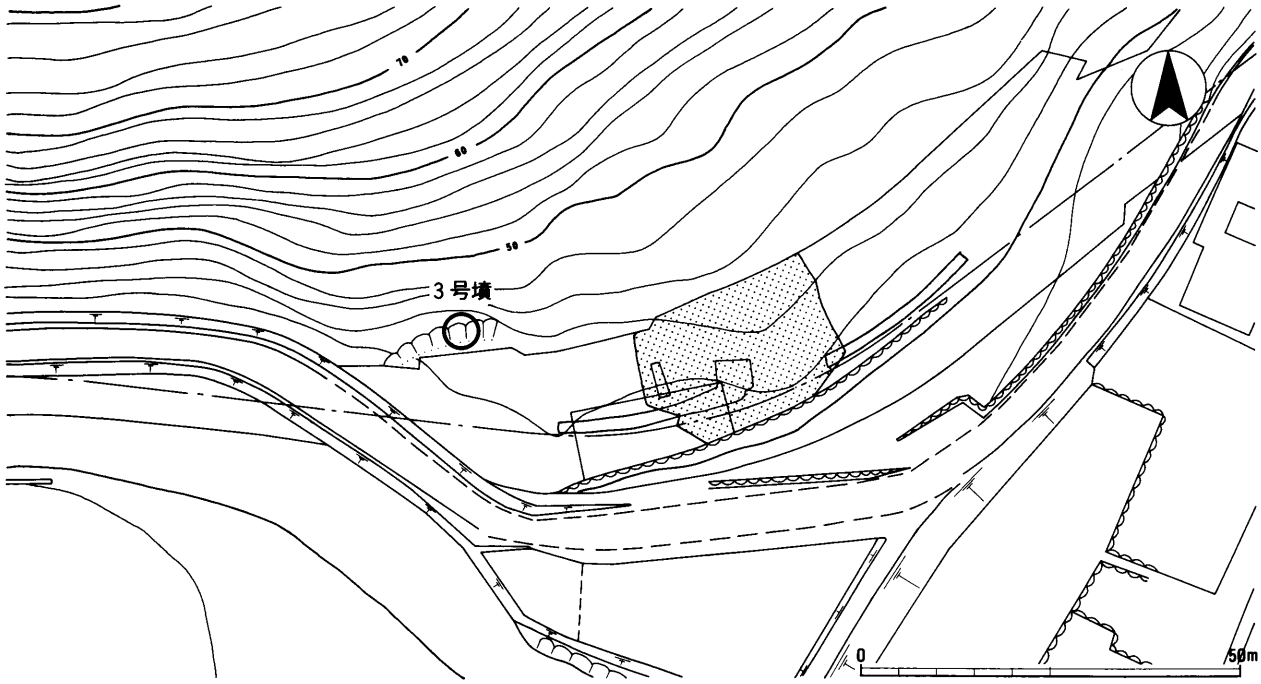
小屋城古墳群を含め、南神山古墳群や近接する中大谷古墳群（７）・東大谷古墳群（８）、穴倉川の対岸に位置する宮ノ谷古墳群（９）・地福谷古墳群（10）の形成時期も、長谷山古墳群の最盛期に概ね併行している。ちなみに、長谷山古墳群の詳細分布調査を行った三重大学原始古代史部会は、宮ノ谷古墳群及び地福谷古墳群を長谷山古墳群の支群として把握し、それぞれ南神山Ａ支群・同Ｂ支群として報告している[②]。

Ⅲ．調査と成果

調査区は、当初事業地内に位置する１号墳のみを想定して設定したが、調査が進む中で新たに２号墳



第２図　遺跡周辺地形図（１：5,000）



第3図　調査区周辺地形図（1：1,000）

第4図　調査前地形測量図（1：200）

が発見された。また３号墳は、かなり崩壊が進行しているが、事業地外にあるため発掘調査は行わず、石室の現状を実測するにとどめた。

調査前の状況は休耕の畑で、竹の生い茂る荒れ地であった。また石室奥壁の石組みは、畑境の石垣に転用されていた。

１．小屋城１号墳の調査と成果

Ａ．墳　丘

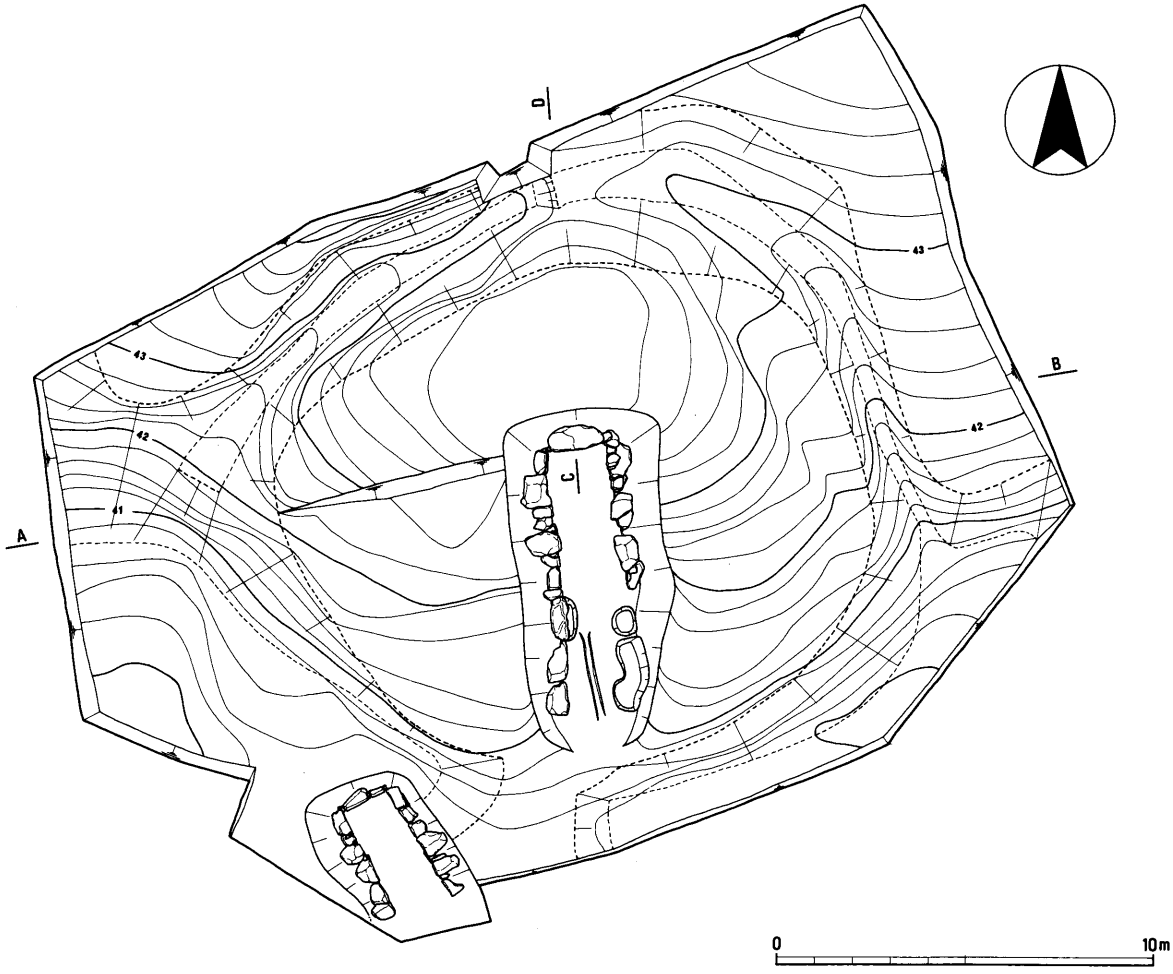
１号墳は、谷川に面した丘陵の裾に築造されると言う立地条件にある。墳頂部の標高は、おおよそ44ｍである。調査前の地形測量の時点では、畑境の石垣の段差があるばかりで、古墳の形状については全くわからない状態であった。調査の結果、周溝下端内側での計測で、直径約17ｍの円墳であることが判明した。

墳形については一見方墳とも見て取れるが、墳丘の南辺は後世の耕地造成の際に直線的に削り取られたものであり、疑いは残すものの、円墳と判断した。また墳丘は、特に南側半分が石室とともに大きく削平されていた。

墳丘の盛土は赤褐色のやや粘土質の土で、下部約１ｍで黒灰色砂混じりの旧表土に達する。ただ、周溝が最も深く掘られている北側ではこの旧表土層は認められず、基盤層は墳丘盛土とほぼ同質の土であった。よって盛土は、周溝掘削による排土を利用したものと判断される。

盛土は赤褐色系の土を主体に、石室に向かってやや下降傾斜しながら、ほぼ平行に積み上げられている。土層断面の観察などから、まず斜面の低位部に盛土して平坦面を確保し、旧表土及び地山を掘り下げて石室基底部を構築して後、順次石の積み上げと盛土を繰り返していったものと判断される。盛土の叩き締めは認められなかった。

基盤層は、墳丘東側の周溝付近で下方に潜り込んでいる。これは古墳が築造される以前の段階で、谷



第５図　遺構平面測量図（１：200）

地形が形成されていたことを示している。調査によっても、墳丘の南東側に自然地形の深い落ち込みのあることが確認された。また西側にも同様の落ち込みがあり、これらのことから１号墳は、南神山古墳群が立地する丘陵から南に伸びた、細い尾根を利用して築造されたものと判断される。

B．周　溝

調査前の状況では、周溝に相当する地形的な変化は全く認められなかった。このため東側で再度試掘トレンチを入れ、周溝の位置を確認した。

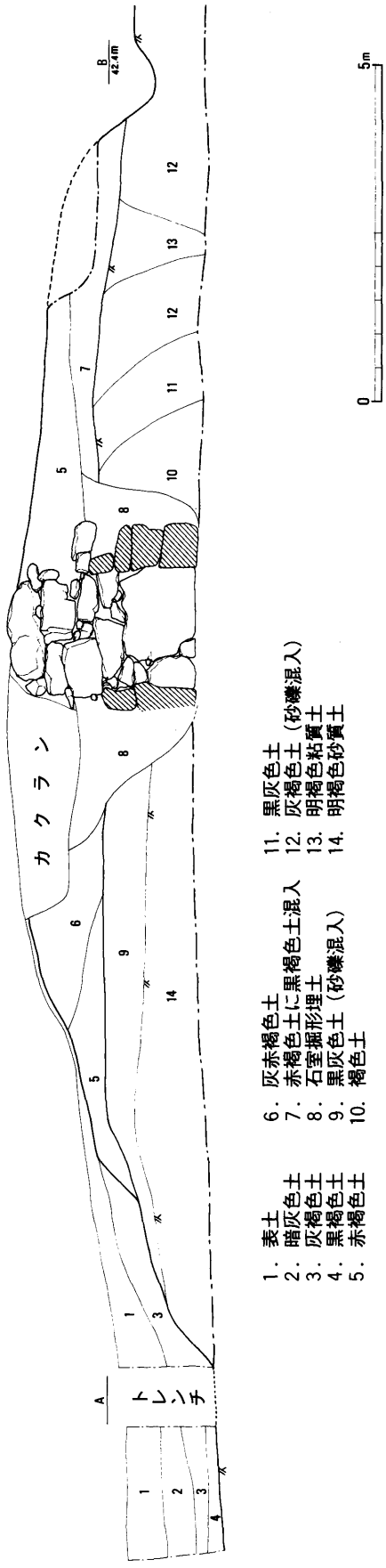
周溝は、前述した西側と南東側の自然の落ち込みに抜けていて、山側では尾根を切断するように深く掘り下げられ、そこを中心に馬蹄形に巡らされている。深さは、北側で墳頂よりの比高差で約1.5mであった。ここでは周溝外側の上端ラインは明瞭に確認できるが、東側では周溝は極端に浅く且つ狭くなり、外側のラインもやや不明瞭となる。

周溝の底は若干平坦となっており、断面形はいわゆる「箱薬研」形となっている。埋土下層からは、須恵器の甕や壷の破片が散乱した状態で出土した。また北側を中心に、周溝内には最大１ｍ前後もの岩石が、かなりの頻度で混入していた。

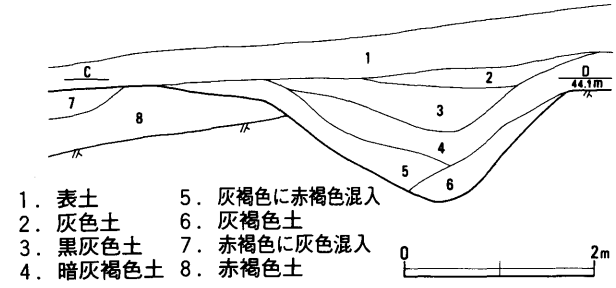
C．埋葬施設

埋葬施設は南に開口する横穴式石室で、平面形は左片袖式である。天井石は既に失われており、全体的に破壊が著しい。特に羨道部分は東壁の石が全く失われ、西壁も基底石を残すのみとなっていた。西壁側で測った石室の残存長は、約７ｍであった。

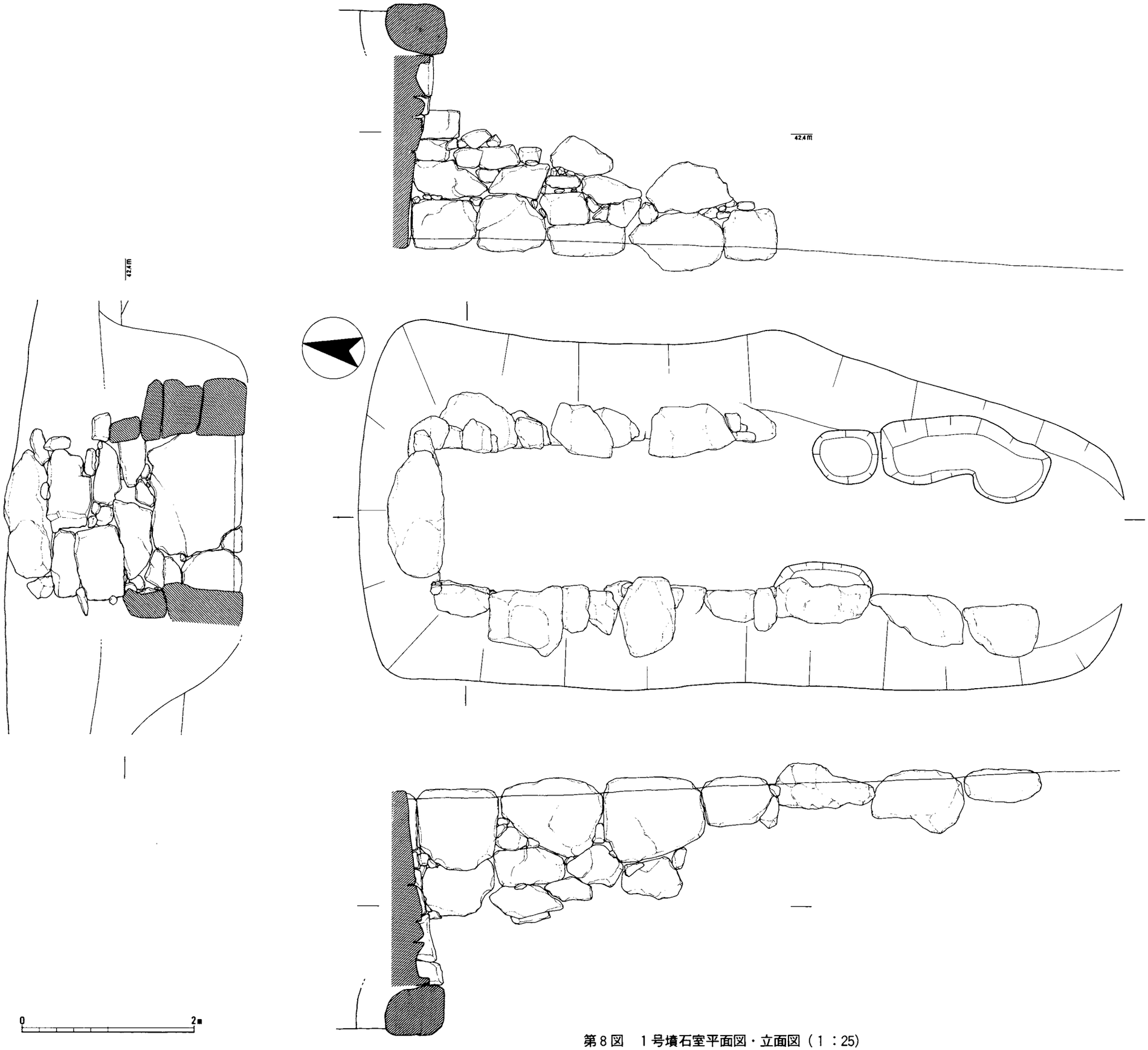
石室内の埋土は褐色の軟らかい土で、後述するように、比較的新しい段階で一挙に埋没したものと考えられる。埋土には、この石室の石材が多く入り込んでいた。それらの中には鑿で故意に割られた痕を残すものもあったが、石室築造当時のものではない。



第６図　１号墳丘断面土層図（１：100）

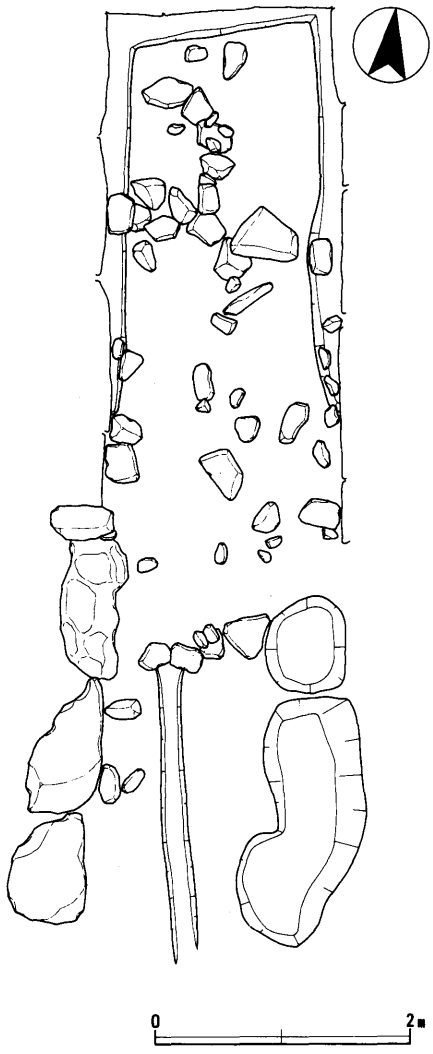


第７図　１号墳周溝埋土断面土層図（１：80）



第8図　1号墳石室平面図・立面図（1：25）

また羨道西壁基底石の一つが、恐らく火などを用いて、やはり故意に割られたと見られることから、石室の破壊は、後世の石材採取によるためと考えられる。この点、周辺が「石切り山」とも通称されていたことも考慮される[3]。



第9図　1号墳石室二次利用面平面図（1：60）

①玄室　玄室の幅は、約1.8mである。長さについては袖石が失われているなど不確定な要素を含むものの、抜き取り痕跡から約4mの長方形であると推定される。高さは天井石がなく不明あるが、畑の石垣に転用されていた奥壁は、現状で床面から2.8mの高さを残していた。

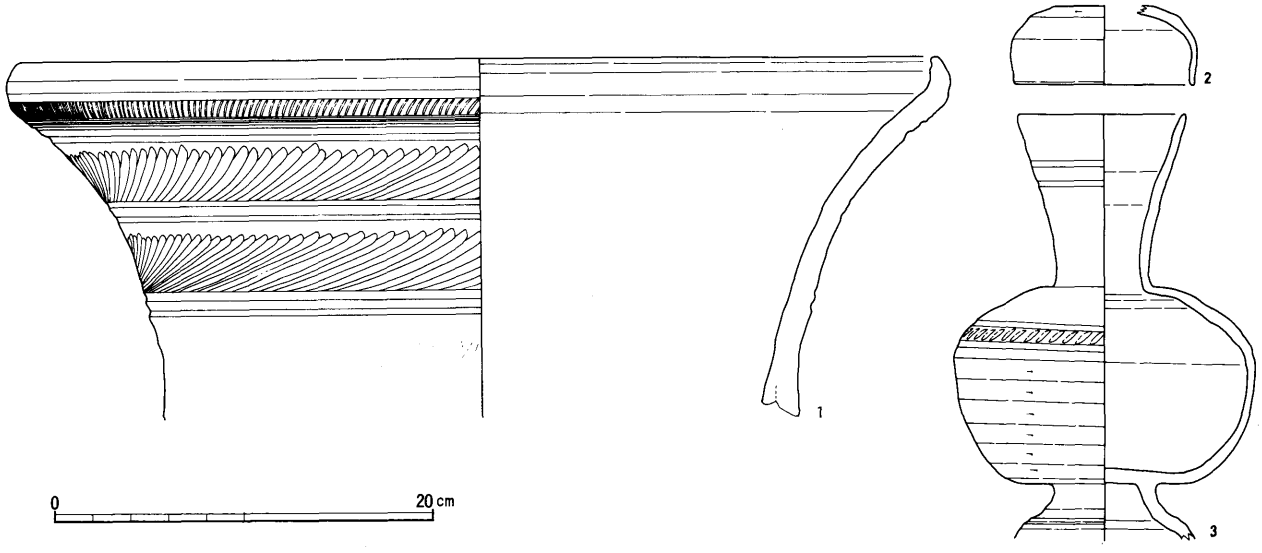
石材のほとんどは花崗岩で、自然石が未加工で用いられている。恐らく、近接する穴倉川などから採集したものと考えられる。

奥壁の基底石には、一辺約1.3mもの巨石が用いられている。また側壁には、これとほぼ同じ高さで一度揃えたと見られる石組みのラインを確認することができる。このことから石室の構築は、まず奥壁基底の巨石を設置し、それを基準にして組まれていったものと推定される。

奥壁基底石の上には平積みの石組みが4段残っているが、やや内傾する特徴を持っている。これは側壁にも確認することができる。玄室の石積みの中程からは、持ち送りの技法が採られていたものと思われる。

側壁の基底には、1m前後の石が面を揃えて並べられている。石積みは、奥壁と異なり比較的小口を用いて積まれる傾向を持っている。

②羨道　羨道の長さは、現状で約3mである。幅は、



第10図　1号墳周溝出土遺物実測図（1：4）

抜き取りの痕跡から約1.2m程と推定される。なお、平田古墳群などに見られる、羨道から続く「ハ」字形に広がる外護列石は認められなかった。

D．後世の二次的利用

玄室と羨道の間には、恐らく閉塞石が存在していたものと推定されるが、発掘調査では確認できなかった。石室には後世に二次的に利用されていた形跡があり、その時に閉塞石が取り除かれたものと考えられる。

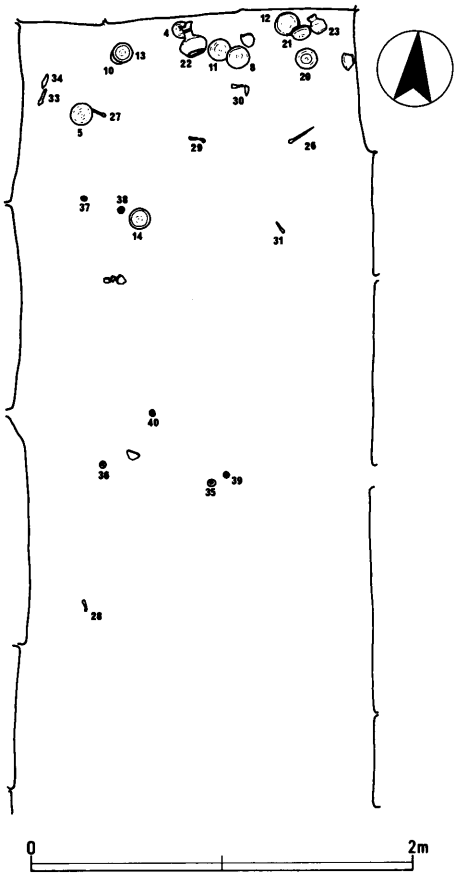
この後世の利用面は、石室床面から約10cmの上位で検出された。南伊勢系埴や山茶碗が出土していることから、年代的には鎌倉時代の後半期頃と考えられる。二次利用面には環状の石列が3ヶ所あり、若干の炭化物や焼土も認められた。周囲には、幅20cm程の排水溝も設けられていた。

E．出土遺物

①　周溝内出土遺物

周溝からの出土遺物は非常に少なく、図示できたのはこの3点で、いずれも須恵器である。

2の蓋は、墳丘西側の落ち込みから出土した。また3の台付き長頸壷は北側で比較的まとまった状態で出土し、ほぼ完形に接合することができた。しかし1の甕破片は、東側を中心にかなり散乱していた。出土状況からは、これらの周溝内出土遺物が、墳丘から自然崩落によって入り込んだのか、あるいは故意に割られて入れられたものなのかは判断できなかった。



第11図　1号墳石室遺物出土状況図（1：40）

②　石室内出土遺物

(a)土器類　出土した土器類は全て須恵器で、奥壁側に集中していた。完形品も多いが、出土の状況から、それらが原位置を保っているとは考え難い。

次に、玄室中央から羨道にかけて出土した高杯や平瓶などは破壊された状態で、かつ破片がかなり散乱していた。これは、後世の攪乱の際に破壊されたものと判断される。

須恵器杯蓋（4～12）　完形品を含め、奥壁付近を中心に9個体出土した。この内、7個体にベンガラと見られる赤色顔料が認められた。ただ10の場合、赤色顔料は口縁部に若干認められるが、これは13の杯身と重なっていたために、杯身のベンガラが偶然付着したものであろう。それに対し他のものは、天井部外面にいずれも故意に付けられたものであった。塗布のパターンは2種類で、4・5・9・11は「¦」、6と7は「＋」形であった。

口径はいずれも12cm前後であるが、やや口縁径の大きな12は、他の杯蓋より時期的に若干遡るものと考えられる。

須恵器杯身（13～17）　図示した5個体が出土した。杯身にも、蓋と同様赤色顔料の認められるものがあった。13と14がそれで、いずれも「＋」形である。杯身には「¦」形はないが、蓋と対応して付けられたものであると考えられる。なお、17のみ羨道部よりの出土である。

以上の蓋・杯については、中村編年Ⅱ－5[4]ないしは6段階、田辺編年ＴＫ209型式[5]と併行する特徴を持っている。

須恵器高杯（18・19）　数個体出土したが、図示できたのはこの2個体であった。出土地点は、19が玄室中央、18が羨道部で、いずれも細かく割れていた。19の脚部には、細い透かしが2方向に開けられている。蓋杯よりも、若干時期的に先行する特徴を

持っている。

須恵器蓋（20）　天井部外面はヘラケズリで丁寧に整えられ、断面凹形の摘みが貼り付けられている。21の椀、ないしは22の長頸壷の蓋とみられる。

須恵器椀（21）　直線的で、やや内傾する口縁部を持ち、器壁は肉厚である。沈線を１条巡らせ、底部外面は回転を用いて丁寧に削り整えられている。

須恵器長頸壷（22）　若干外反した口縁部に、球形の胴部を持つ。底部は平らであるが、顕著なものではない。口縁部には２条の沈線を２段、胴部にも１条の沈線を２段に巡らせている。

出土時点では底部が円形に抜けていたが、破片は付近にあり、故意によるものではなかろう。

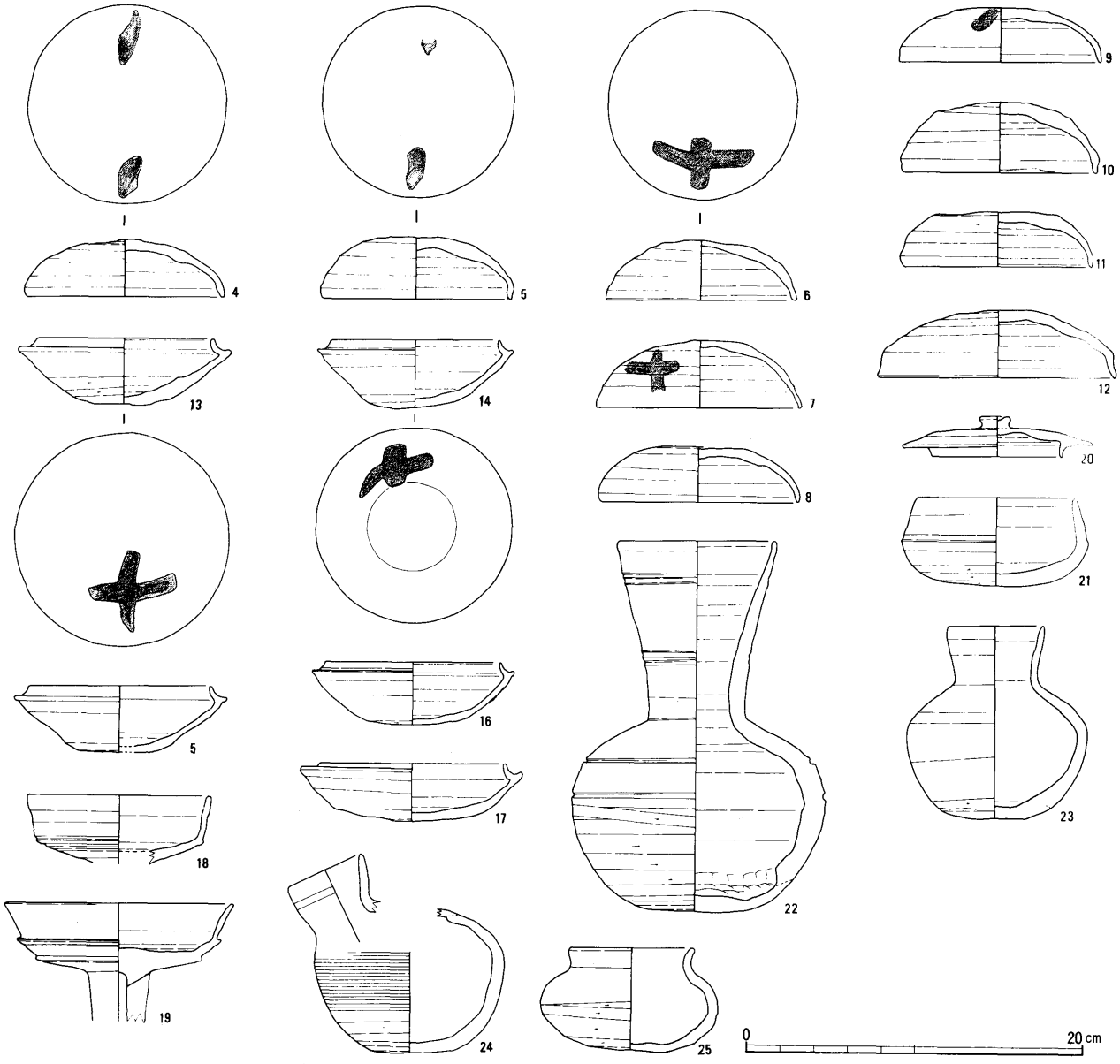
須恵器短頸壷（23・25）　23はやや肩の張った胴部を持つもので、奥壁付近から完形で出土した。

25は、偏平の胴部に、外反した短い口縁が付く。端部は丸く、やや厚い。出土地点は、玄室の中央である。

須恵器平瓶（24）　羨道部分より、割れて散乱した状態で出土した。底部外面には回転ケズリが施され、胴部にはカキメが見られる。

(b)金属器

耳環（35～40）　金箔装の耳環である。全てで６個体出土した。形状から、35と36、37と38、39と40はそれぞれ対であると見られる。このことから、この石室への埋葬は、少なくとも３体であったと考え



第12図　1号墳石室出土遺物実測図（１：４）

られる。出土地点は、37と38が奥壁付近、35と36及び39と40が玄門付近であった。

保存状態は37・38の一対が最も良好で、施された金箔はほぼ完全に残っていた。また35・36の一対にも、部分的に金箔が残っていた。これらは、いずれも銅の地金に金箔を貼り付けたものである。後世に攪乱を受けたと言う不確定要素を含むものの、保存状態や出土状況より、37・38の一対が最も新しい追葬に伴うものと言う可能性がある。

鉄鏃（31～34） 奥壁付近から3点出土したが、いずれも異なった形態のものであった。なお、32は31と同一の個体と見られる。

31は、鏃身部の非常に小さい長頸鏃である。篦被には若干の張出があり、棘篦被に近い形状を示している。鏃身部には、片側に鎬が認められる。

33の鏃身部は平造の柳葉形で、逆刺を持つ。やや大形の34には逆刺はないが、鏃身部は同じく平造の柳葉形である。

刀子（30） やはり奥壁付近から出土した。切先と茎の端部を欠くが、ほぼ完形である。刃部は肉厚の蛤刃で、茎には木質をよく残している。

鉄釘（26～28） 断面は方形で、一端を尖らせ、もう一端は楕円形に潰されている。形状から、釘と判断される。

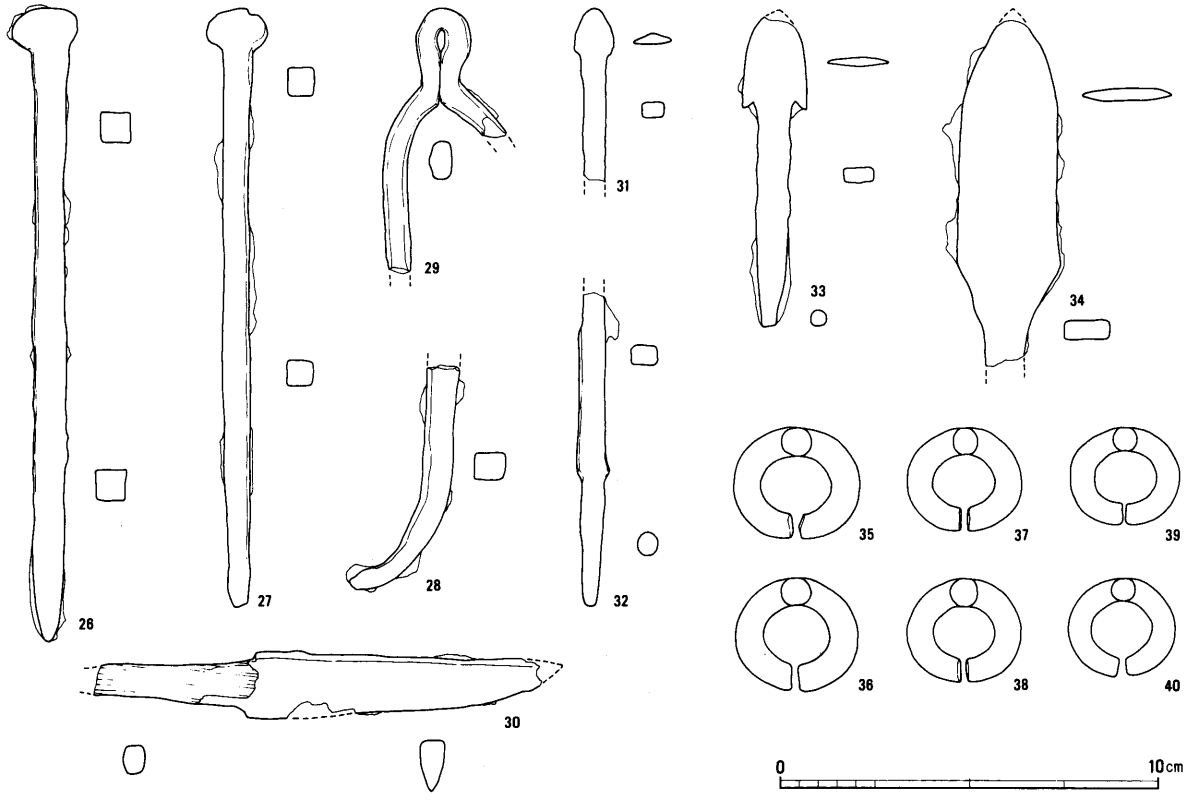
出土地点は、26と27が奥壁より、28が玄門付近であった。特に完形の26と27は、先端を玄門方向に向けて、逆「ハ」字形で約1mの間隔で出土している。このことから、あるいは棺材をとめるために用いられたとも考えられるが、殴打された痕跡はなく、現状では用途不明と言わざるをえない。

不明金具（29） 断面形は、隅丸の長方形である。石室内からは、この金具に関連する鉄製品は出土しておらず、用途は不明である。

2．小屋城2号墳の調査と成果

A．埋葬施設

2号墳石室は、1号墳の周溝埋土掘削の段階で新たに発見されたものである。石室の一部は、耕地の段差にかかって全く失われている。また石室内には石材が乱雑に廃棄されているなど、耕地造成の際と考えられる破壊が著しい。このため石室については奥壁から2.7mを残すものの、その規模や平面形を明らかにできない。また墳丘盛土の有無についても、恐らく存在したであろうが、現状では確認できなかっ

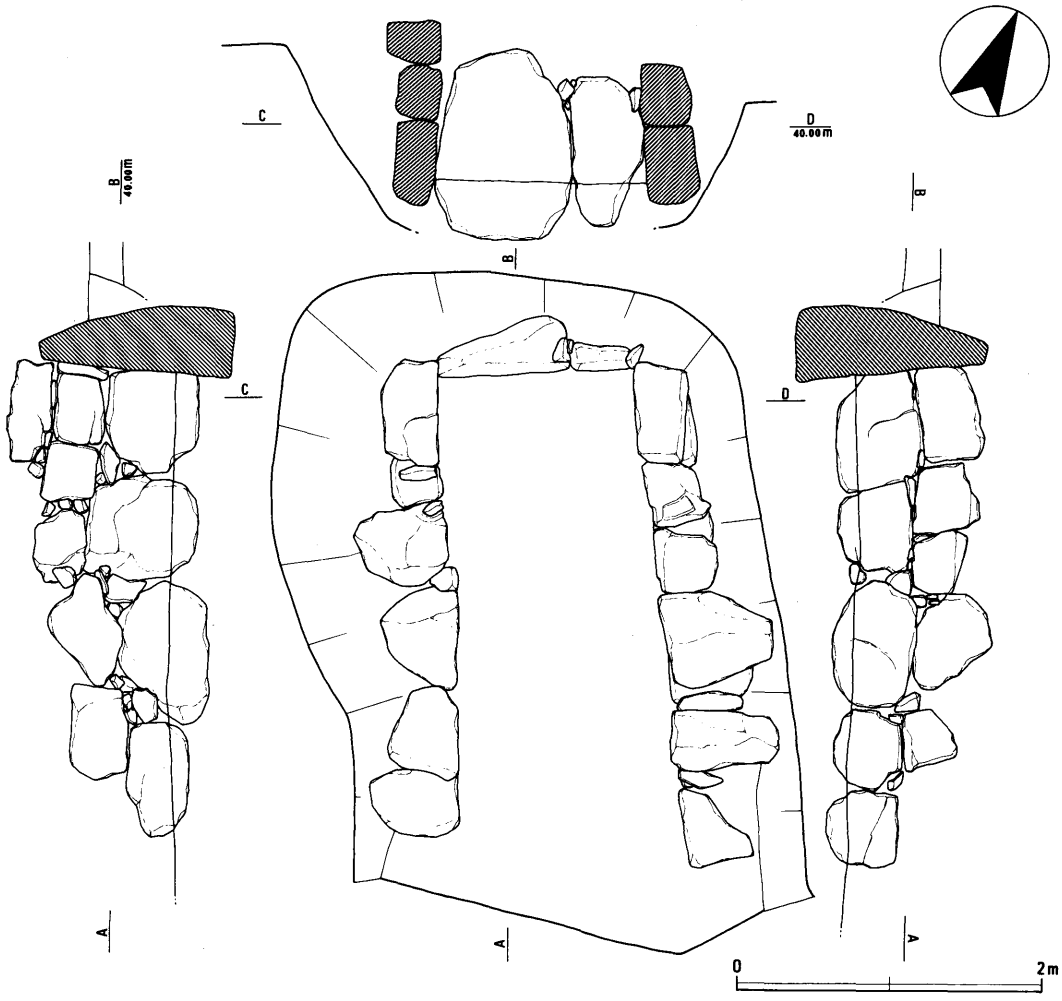


第13図　1号墳石室出土遺物実測図（1：2）

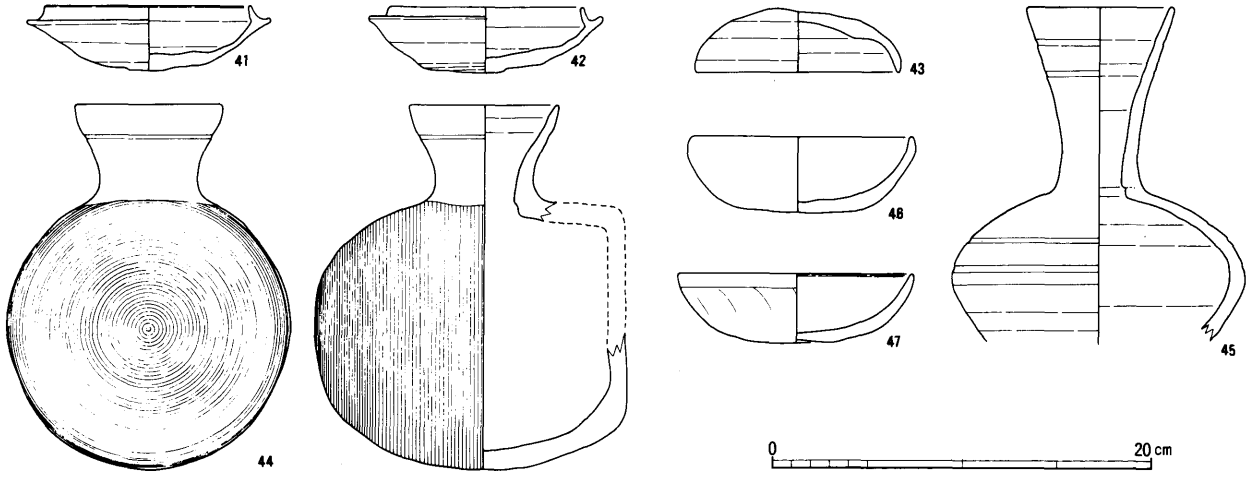
た。

石室幅は1.4mで、1号墳の石室に比べやや小規模である。石組みの残存は、西壁で3段、東壁で2段であった。奥壁には比較的大きな石が用いられているが、きわめて偏平であること、側壁も小振りで偏平な石が平積みされていることから、石室の石組はそれほど高いものではなかったと推定される。

構築年代は、出土遺物の特徴から、1号墳とほとんど併行する時期と考えられる。恐らく1号墳が構築されて後、あまり時間が経過しない間に2号墳が作られたものと考えられる。



第14図　2号墳石室平面図・立面図（1：50）



第15図　2号墳石室出土遺物実測図（1：4）

B．出土遺物

出土遺物の量は１号墳に比べて非常に少なく、図示できたのはこの７点であった。

須恵器の杯身（41・42）と杯蓋（43）は、奥壁付近からの出土である。１号墳出土の蓋杯と同様、ＴＫ209型式併行の特徴を持っている。

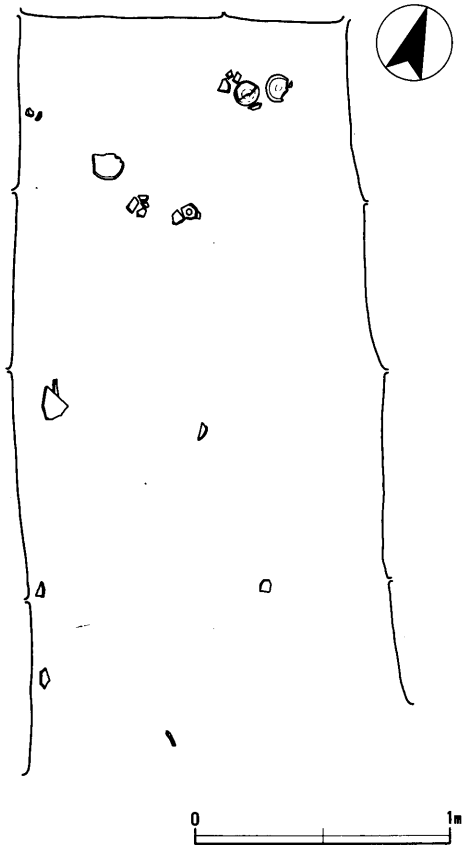
45の長頸壷は、１号墳出土の22と類似した特徴を持つ。ただ、22と比べて頸部の径が細くなっていること、および体部の肩がやや張っているなど、年代的には若干下るものと位置づけられる。44俵瓶の年代も、45長頸壷に引きつけて理解したい。

46・47の土師器椀も、奥壁付近からの出土であった。

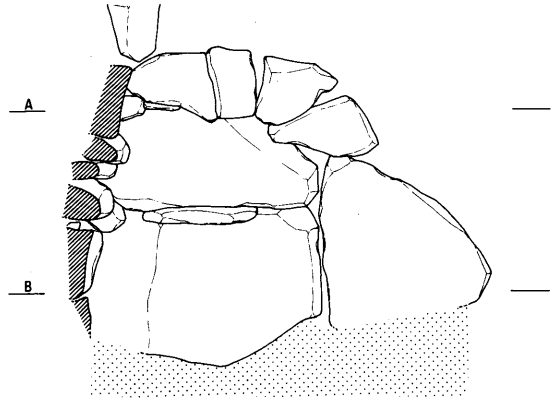
３．小屋城３号墳について

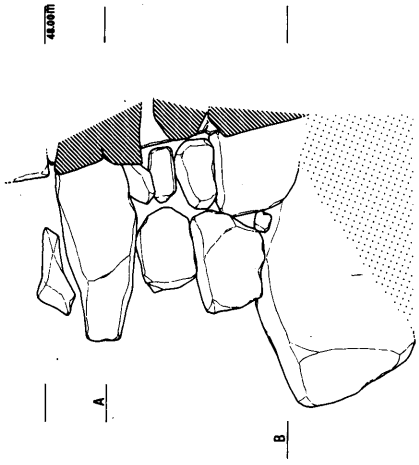
３号墳の存在も、今回の発掘調査に伴う周囲の地形観察によって、新たに確認されたものである。前述したように調査区外にあるため、詳細な調査を行うことができなかった。よってここでは、その現状を報告するだけに止めたい。

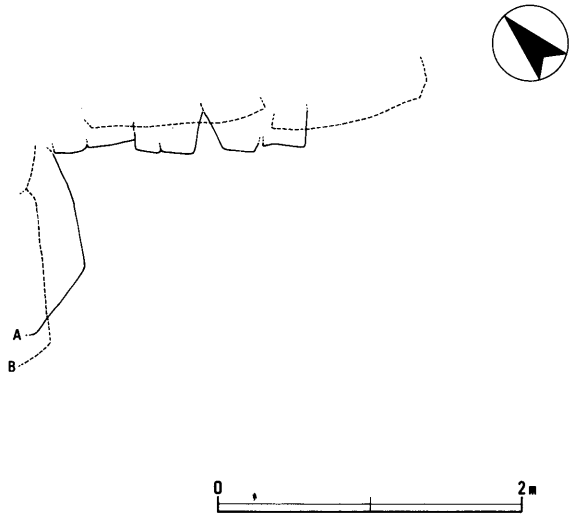
３号墳は１号墳の北西、比高差３ｍ程の高位に位置している。石室は墳丘とともに大きく崩落しており、現状では石室の奥壁と西側壁の一部をかろうじて残しているのみである。石組みは、持ち送りの技法を用いて積まれている。墳形については不明である。



第16図　２号墳石室遺物出土状況図（１：30）







第17図　３号墳石室実測図（１：50）

Ⅳ. 結　　語

1．小屋城古墳群の把握について

小屋城古墳群は、南神山古墳群と呼ばれるまとまりと同一丘陵上に位置している。この点から小屋城古墳群を、南神山古墳群の一支群として把握することも可能である。しかし、丘陵の尾根上で比較的眺望のきく南神山古墳群と、狭い谷間に面した低位斜面にある小屋城古墳群とでは、その選地において意識の相違が認められる。よって両者により客観的な必然性が想定されない以上、現段階では別個の古墳の集合単位として把握しておくことにする。

さて小屋城古墳群は、わずか3基の古墳によって構成されている。同様のあり方は、穴倉川の対岸に位置する地福谷古墳群や宮ノ谷古墳群にも認めることができる。地形的な条件も考慮されるが、このようなあり方は、服部伊久男氏の言うところの、最小単位としての「小支群」に相当するものと認識されよう[6]。例えば南神山古墳群の場合でも、尾根上に直線的に連なる1～4号墳を除いて、5・6・13・14号の4基と7～9号の3基からなる二つの小さなまとまりがある。また「長谷山古墳群」として報告されている古墳群の支群の中にも、やはり数基単位のまとまりを見いだすことができる。

勿論、これらが当時のどの階層集団の単位を反映したものなのかは判然としない。しかし、少なくともこの周辺域での、古墳を造営しうる最小単位集団が営んだ墳墓群として認識することは可能であろう。これらを、当時の社会的集団単位とどのように関連付けるかは、長谷山を中心とした古墳群の形成とその位置付けとも関わって、これからの重要な課題である。

2．古墳群造営の時期と被葬者の関係について

1号墳は破壊が著しかったとは言え、石室からは3対の耳環が出土しており、少なくとも3体が埋葬されていたと考えられる。出土土器は、TK209形式併行を主体としつつも、若干の時期幅が認められる。これらのことから見て1号墳では、比較的短期間に追葬が行われたと考えられる。このことから被葬者相互の関係は、婚姻関係も含めて、かなり近しい血縁者と見るのが最も自然であろう。

次に2号墳であるが、出土遺物は先に述べたように、時期的に1号墳よりも僅かに下るものの、ほぼ同時期と言える。つまり2号墳は、1号墳が未だその単位集団の墳墓として十分機能していた段階で築造されたものとすることができる。このことは、1号墳と2号墳の位置関係からも、2号墳の被葬者が1号墳の被葬者と、やはり近い関係にあったことを示している。しかし2号墳の石室は、1号墳のそれと比べ明らかに規模の小さなものとなっている。また、埋葬の時期が近接しているしているにもかかわらず追葬と言う形態をとっていないことから、2号墳の被葬者は1号墳への追葬者とは、若干その性格を異にしている可能性も指摘できる。

3号墳をどのように位置付けるかは今後の課題であるが、少なくとも1号墳と2号墳のあり方は、ある種の家族墓的な「単位群」として位置付けられることを示している。

3．蓋・杯の記号について

1号墳の石室から出土した須恵器の蓋・杯には、相当な頻度で、ベンガラと見られる赤色顔料による記号が付けられていた。記号には、「＋」と「¦」とがある。県内での事例は現在報告されていないが、但馬地方では類似した遺物の出土事例が幾つか報告されている[7]。また隠岐島の東笠根1号墳からも、出土した須恵器蓋杯8個体中4個体に「＋」記号が、やはり赤色顔料で付けられていた[8]。時期的にもTK209ないしはTK217型式併行期と、小屋城1号墳の時期とほぼ同じである。また出土した蓋杯全体に占める記号付き個体の割合が非常に高いことも、当古墳の特徴と類似している。

ただ、「＋」記号は共通しているものの、当古墳にある「¦」は但馬にはなく、逆に但馬で見られる「⊔」は当古墳には見当たらない。また当古墳の記号が赤色顔料であるのに対し、但馬のそれは漆であると報告されているなど、微妙な違いを見せていることも事実である。しかし、両者が伊勢と但馬と言う地理的にかけ離れていることから見れば、或いはそ

れは地域的な相違に過ぎないとも見なされる。むしろ時期や出土状況、記号の共通性や須恵器の蓋・杯に限られている点などに注目すべきであり、同様の意識下での産物と言える。この点、伊勢地方より類例が出土した以上、山陰や但馬地方のみの特色とした谷本進氏の見解[9]は再考されねばならないと考えられる。勿論、未だわずかな類例にしか過ぎない現段階で、これを古墳時代後期における一般的な葬送儀礼の一つとして位置付けることはできない。ただ、但馬の例の場合、用いられた塗料が比較的残存しやすい漆であったことは示唆的である。隠岐や小屋城1号墳の例から見て、恐らくそれは赤漆ではなかったかと考えられる。

ちなみに、両地域に共通している「＋」記号について、谷本氏や勝部昭氏は『万葉集』にみえる「紐結び」などの言葉から、それを死者の魂を封じ込める呪術儀礼ととらえ、「＋」記号を同様の儀礼であるとの解釈を示されている[10]。しかし既に松前健氏も指摘している[11]ように、古代の「霊結び」儀礼は死者の魂を鎮めるのではなく、遊離しかけた魂を繋ぎ留め、活性化させるための儀礼であった。また、「＋」記号を直ぐさま「紐結び」と見なすこと自体にも、疑問なしとは言い難い。

4．まとめ

以上、今回の発掘調査結果の成果を基に、若干の検討を試みた。しかし、いずれも問題点を提示したに過ぎず、結論を導き出すまでには到らなかった。ただ、特に赤色顔料などによって記号の付けられた須恵器蓋杯については、当該期の葬送儀礼の解明に直結するものである。今後、更に事例報告の増加する可能性もあり、注目してゆく必要がある。

（小林）

《註》

① 安濃町遺跡調査会『平田古墳群』 1987年
② 三重大学歴史研究会原始古代史部会「長谷山群集墳分布調査報告」『ふびと』40号 1983年
③ 地元の聞き取りによる。
④ 中村浩ほか『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978年
⑤ 田辺昭三『陶邑古窯祉群Ⅰ』平安考古学園クラブ 1966年
⑥ 服部伊久男「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集』第9 1988年
⑦ 谷本進「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古学』第2号1985年
⑧ 勝部昭「十印のある土器」『古代学研究』第94号1980年
⑨ 前掲註⑦
⑩ 前掲註⑦および⑧
⑪ 松前健「鎮魂の原義と宮廷鎮魂祭の成立」『神々の祭祀と伝承』1993年

番号	遺構	器種	器形	法量（cm）	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度（%）	備考	登録番号
1	1号墳 周溝	須恵器	甕	口：50 高：－	回転ナデ	灰色	密 （微砂粒を含む）	良	口縁 33		6－1
2	〃	〃	蓋	口：9.6 高：4.2	ロクロ成形 天井部外面ヘラケズリ	灰色	密 （微砂粒を含む）	良	35		12－2
3	〃	〃	長頸壺	口：8.6 高：－	ロクロ成形 体部下半ヘラケズリ	灰色	密 （細砂粒を含む）	良	90		8－2
4	1号墳 石室	〃	杯蓋	口：12 高：3.4	ロクロ成形 天井部外面ヘラケズリ	灰色	密 （細砂粒を含む）	良	完形	外面に「¦」記号	1－2
5	〃	〃	〃	口：11.5 高：3.7	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切り	灰色	密 （微砂粒を多く含む）	良	完形	外面に「¦」記号	2－3
6	〃	〃	〃	口：11 高：3.6	ロクロ成形 天井部外面ヘラケズリ	灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	80	外面に「＋」記号	5－1
7	〃	〃	〃	口：12.2 高：4	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切り	灰色	密 （細砂粒を含む）	良	50	外面に「＋」記号	9－4
8	〃	〃	〃	口：11.7 高：3.3	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切りケズリ	灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	完形	歪み大	5－4
9	〃	〃	〃	口：12 高：3.2	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切り	灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	40	外面に「¦」記号	4－3
10	〃	〃	〃	口：11.4 高：4.2	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切り	白灰色	密 （1～2㎜の砂粒を多く含む）	良	完形	口縁部に赤色顔料付着	2－2
11	〃	〃	〃	口：11.2 高：3.3	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切りケズリ	白灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	完形	外面に「¦」記号	4－1
12	〃	〃	〃	口：14.2 高：4	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切りケズリ	白灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	完形	火襷	4－2
13	〃	〃	杯身	口：10.6 高：4	ロクロ成形 底部ヘラ切り	灰色	密 （細砂粒を多く含む）	良	完形	外面に「＋」記号	2－1
14	〃	〃	〃	口：10 高：4.1	ロクロ成形 底部ヘラ切り	灰色	密 （2㎜の砂粒を含む）	良	完形	外面に「＋」記号	3－2
15	〃	〃	〃	口：10.8 高：3.4	ロクロ成形 底部ヘラ切り	灰色	密 （微砂粒を含む）	良	40		9－1
16	〃	〃	〃	口：10.4 高：3.7	ロクロ成形 底部外面ヘラケズリ	黄灰色	密 （細砂粒を含む）	良	30		5－2
17	1号墳 羨道	〃	〃	口：11 高：13.2	ロクロ成形 底部ヘラ切りナデ	白灰色	密 （細砂粒を含む）	良	40		9－2
18	〃	〃	高杯	口：10.9 高：	ロクロ成形 底部外面ヘラケズリ	暗灰色	密 （微砂粒を含む）	良	口縁 60		9－3
19	〃	〃	〃	口：13.6 高：－	ロクロ成形	暗灰色	密 （細砂粒を多く含む）	良	杯部 30		10－5
20	1号墳 石室	〃	蓋	口：7.8 高：2.4	ロクロ成形 天井部外面ヘラケズリ	灰色	密 （細砂粒を含む）	良	完形	摘まみ貼り付け	4－4
21	〃	〃	椀	口：9.5 高：5.2	ロクロ成形 底部外面ヘラケズリ	白灰色	密 （1㎜程の砂粒含む）	良	完形		5－3
22	〃	〃	長頸壺	口：9.5 高：22	ロクロ成形 体部外面下半回転ケズリ 底部内面指押さえナデ	暗灰色	密 （細砂粒を多く含む）	良	完形		1－1
23	〃	〃	短頸壺	口：5.7 高：11.4	ロクロ成形 底部外面ヘラ切りヘラケズリ	白灰色	密 （1～4㎜の砂粒を含む）	良	完形		3－1
24	1号墳 羨道	〃	平瓶	口：5 高：11.8	ロクロ成形 体部カキメ 体部下半ヘラケズリ	白灰色	密 （微砂粒を含む）	良	95		12－3
25	1号墳 石室	〃	短頸壺	口：7.4 高：6.1	ロクロ成形 体部下半ヘラケズリ	灰色	密 （微砂粒を含む）	良	95	底部外面にヘラ記号	10－4
41	2号墳 石室	〃	杯身	口：10.9 高：3.4	ロクロ成形 底部ヘラ切りナデ	灰色	密 （4㎜の砂粒を含む）	良	完形		10－2
42	〃	〃	〃	口：10.3 高：3.5	ロクロ成形 底部ヘラ切りナデ	灰色	密 （2㎜の砂粒を含む）	良	完形		10－1
43	〃	〃	杯蓋	口：10.8 高：3.4	ロクロ成形 天井部外面ヘラ切り	白灰色	密 （細砂粒を含む）	良	90		12－1
44	〃	〃	俵瓶	口：7.8 高：19.3	ロクロ成形 体部カキメ	褐灰色	密 （細砂粒を多く含む）	良	80	歪み大	13－1
45	〃	〃	長頸壺	口：7.8 高：－	ロクロ成形 体部下半ヘラケズリ	白灰色	密 （細砂粒を含む）	良	60		8－1
46	2号墳 石室	土師器	椀	口：11.4 高：4	ナデ 口縁ヨコナデ	黄橙色	密 （細砂粒を含む）	良	50		9－5
47	〃	〃	〃	口：12.4 高：3.6	外面オサエ　内面ナデ 口縁ヨコナデ	黄橙色	密 （2㎜の砂粒を含む）	良	80	底部外面に木葉痕跡	10－3

第1表　出土遺物観察表

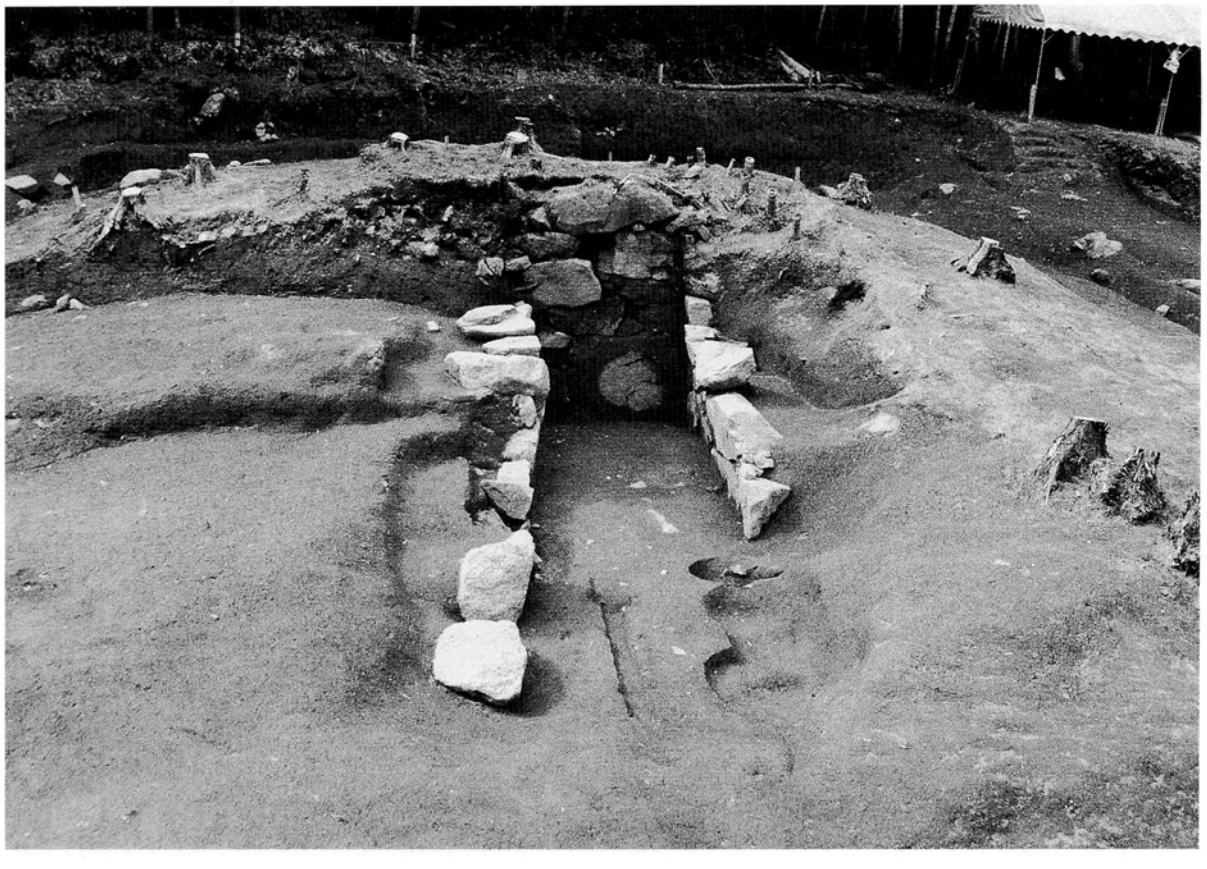
１号墳調査前（南から）

１号墳石室検出状況（南から）

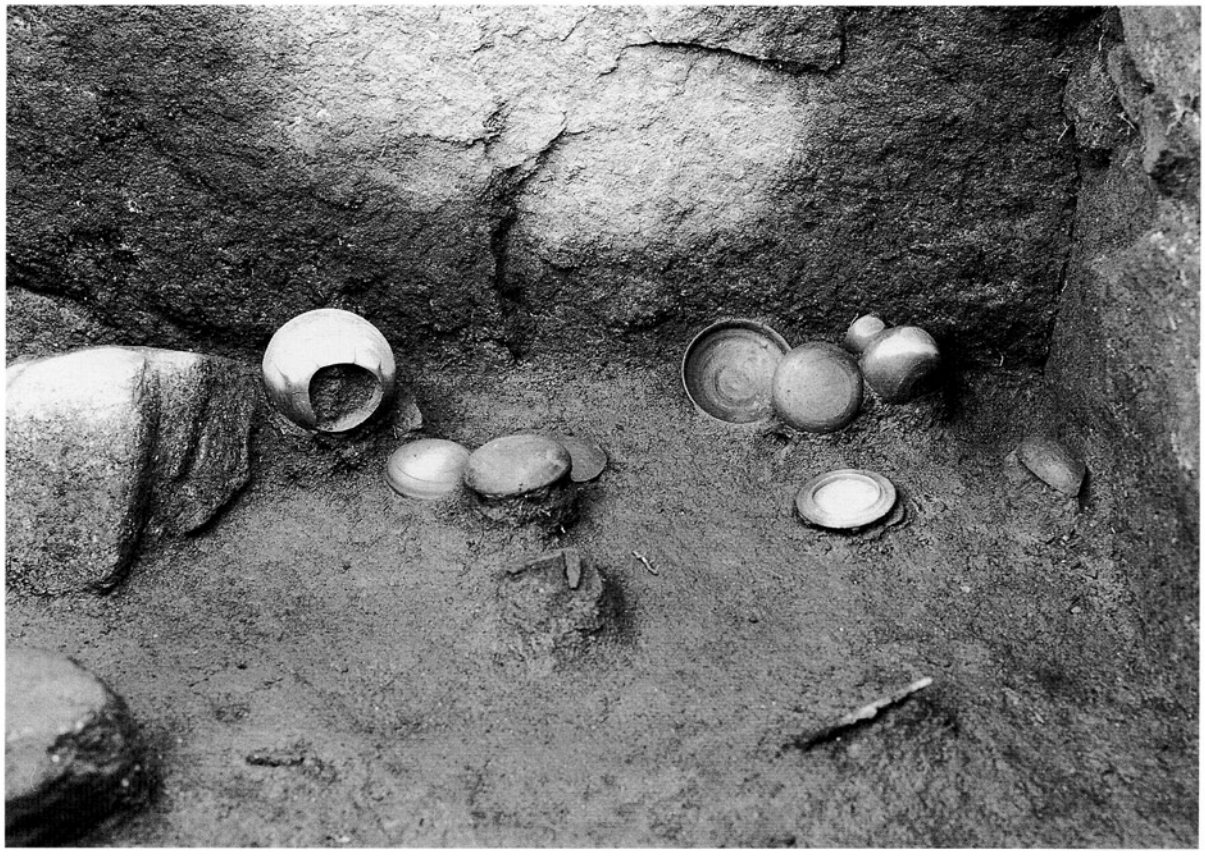
１号墳丘表土除去作業風景（南西から）

１号墳北側周溝埋土除去作業風景（北東から）

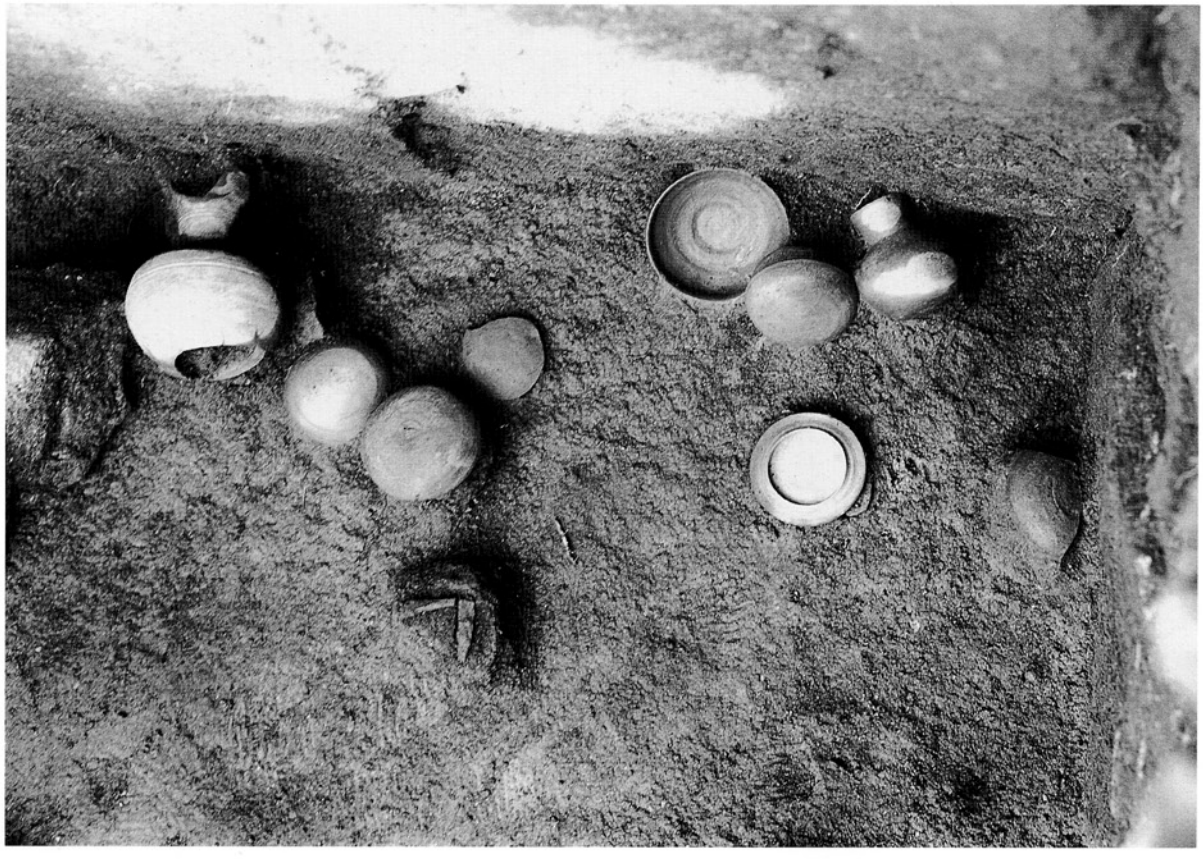
１号墳石室（南西から）



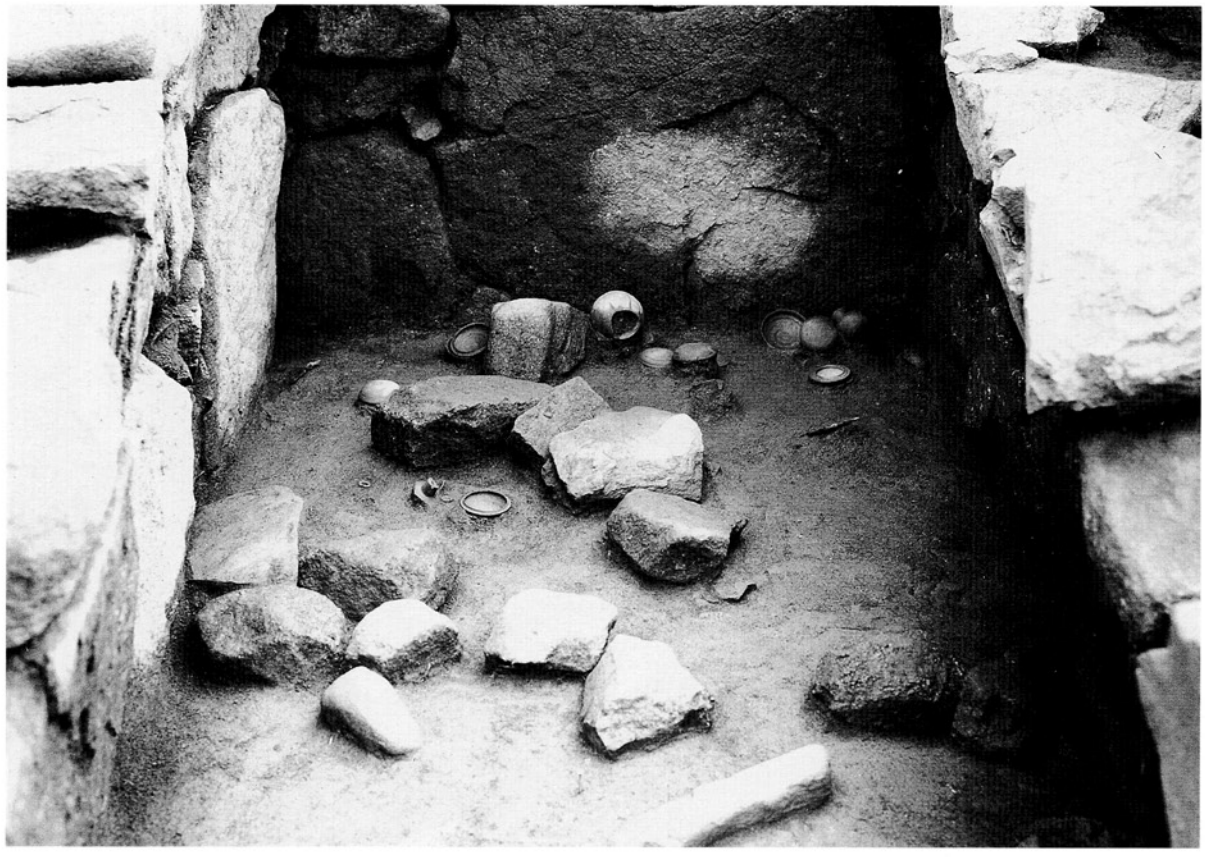
１号墳石室（南から）



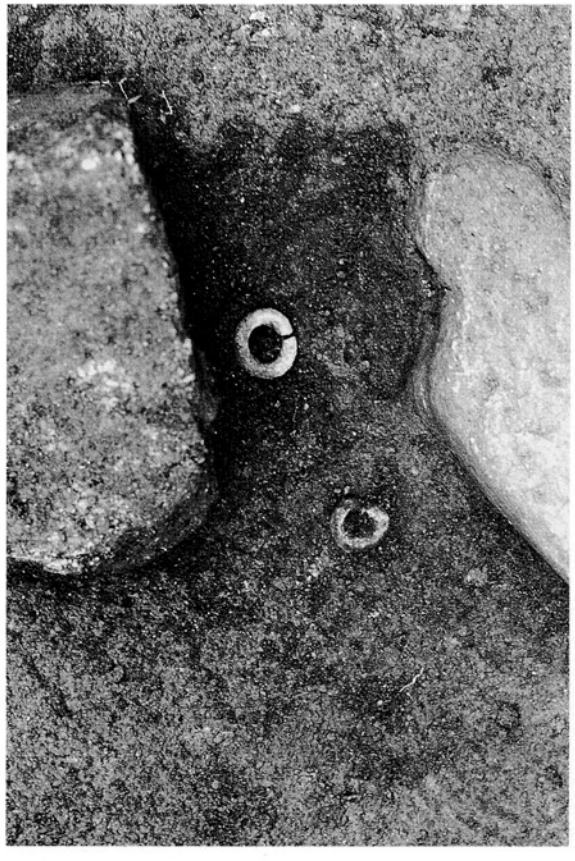
１号墳石室遺物出土状況



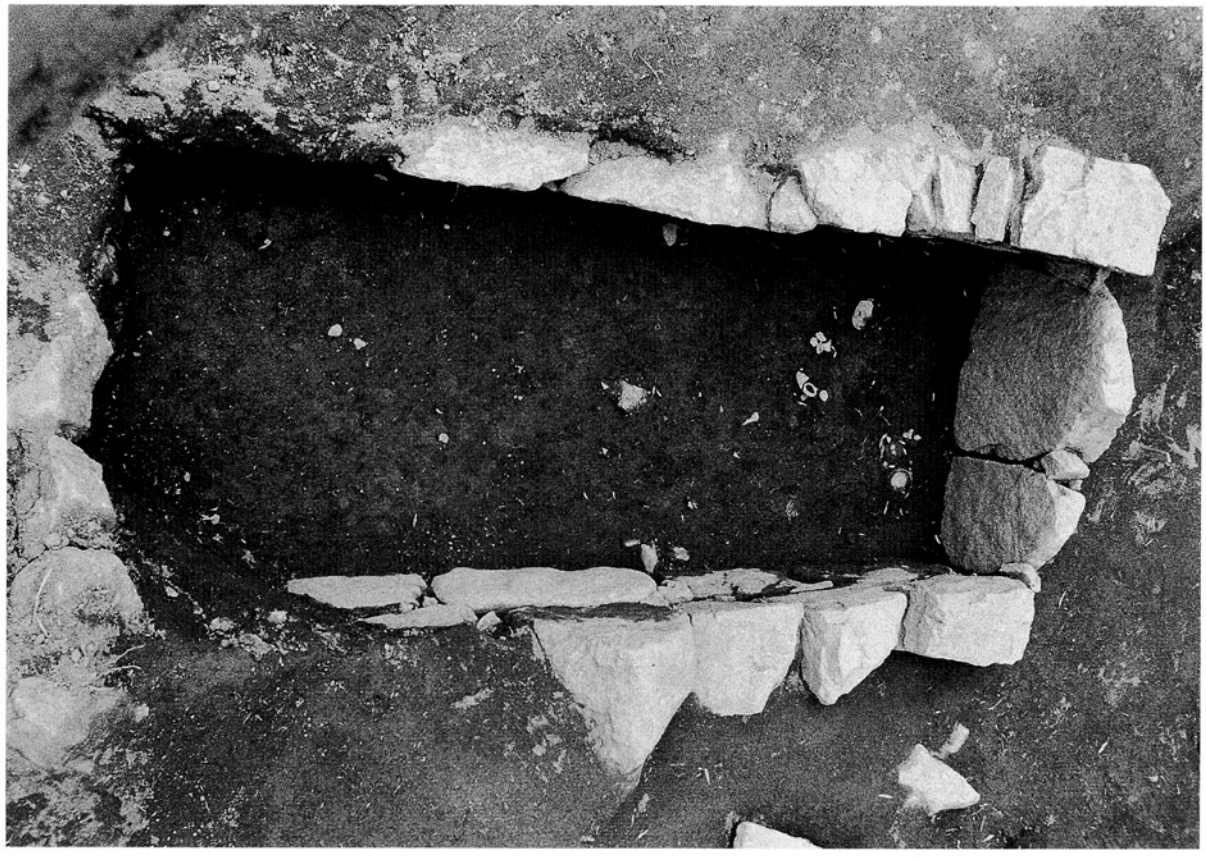
１号墳石室遺物出土状況（上から）



１号墳石室遺物出土状況（南から）

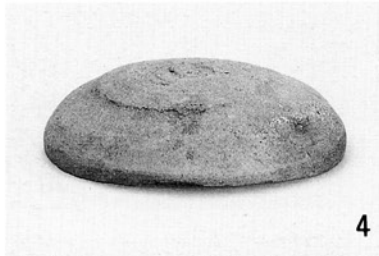


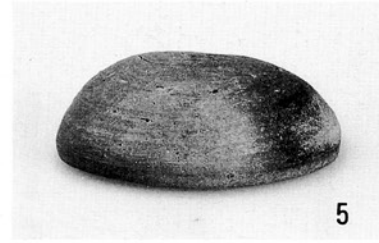
１号墳石室耳環出土状況

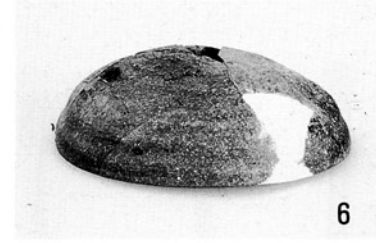


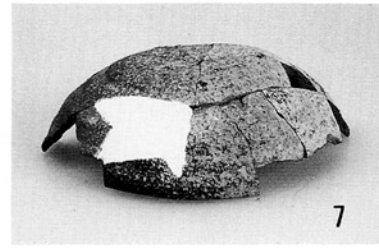
２号墳石室（上から）

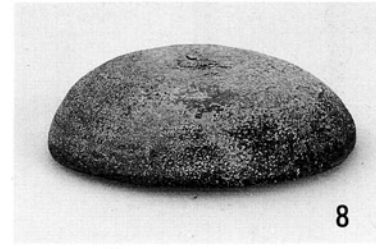
３号墳石室（南東から）

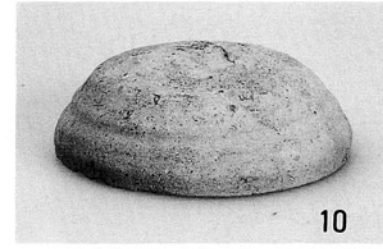


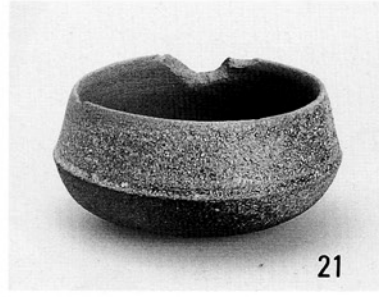


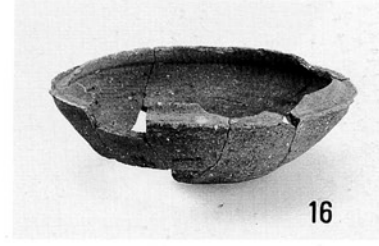




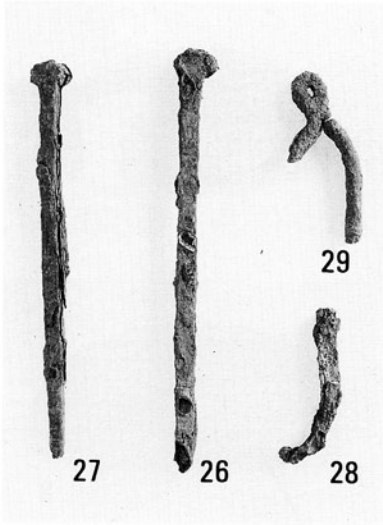


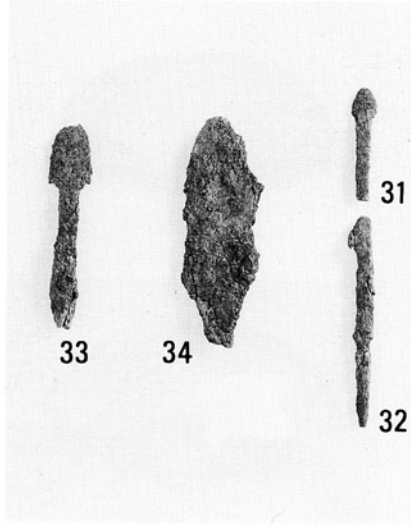


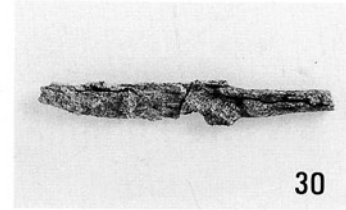


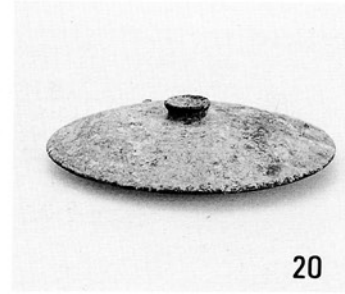


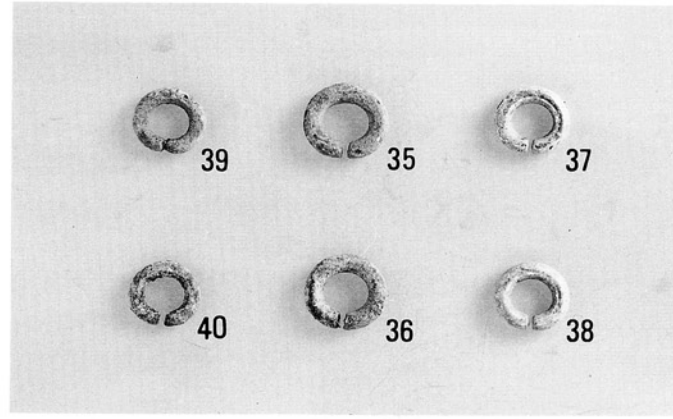
出土遺物（１：３）

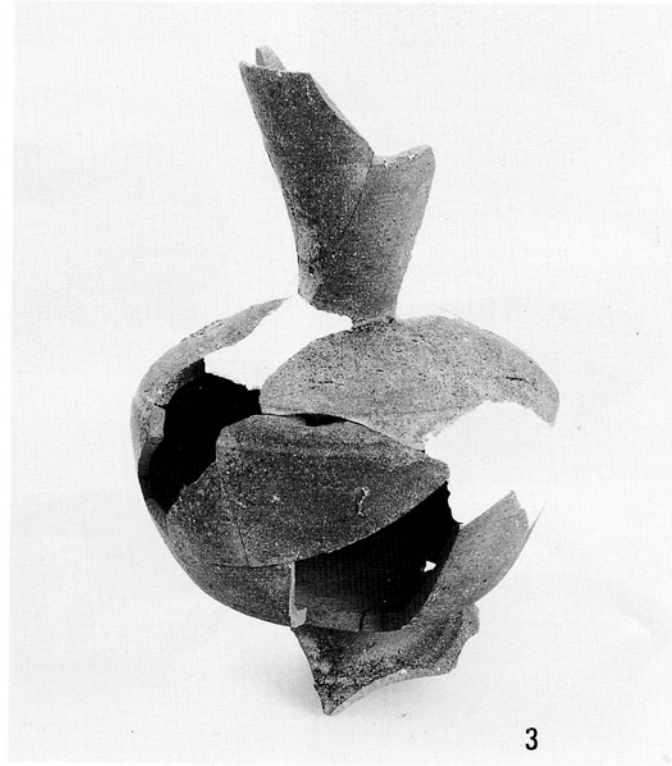




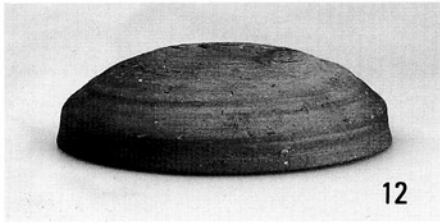


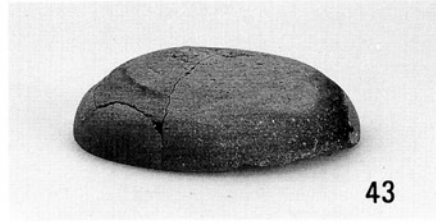


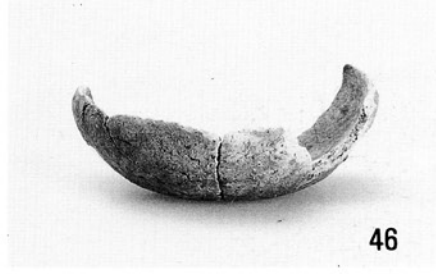


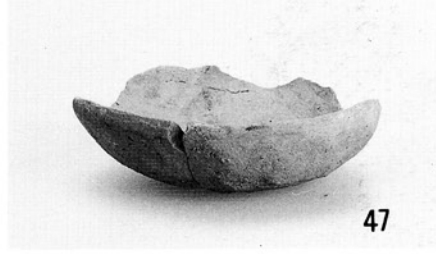


出土遺物（１：３）









出土遺物（１：３）

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　120

小屋城古墳群

1994(平成6)年3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社